

コリント人への手紙第一7章29-31節 「霊的な断捨離」

1A 近づいている「時」 29

1B 時季としての時

2B 最も大切なこと

3B 主のみこころ

4B 御子の到来から始まる終わり

2A 世との軽快な関わり 29-31

1B ないような付き合い 29-30

2B 過ぎ去る世の有様 31

本文

コリント人への手紙第一7章を開いてください。聖書通読の学びは、コリント第一6章まで来ました。午後に7章を一節ずつ見ていきますが、今朝は29-31節に注目します。「²⁹兄弟たち、私は次のことを言いたいのです。時は短くなっています。今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。³⁰泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように、買う人は所有していないかのようにしていなさい。³¹世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。」

パウロは、男女の性の営みについて、その逸脱した問題が教会にあったことを6章で取り扱っていました。7章は、結婚についてコリントの教会の人々がパウロに手紙で書いていたことについて、意見を述べている部分です。午後にじっくりと見ていきますが、パウロは、結婚している人たちはそのまま結婚していること。そうでない人は、自分の意見では独身のままだがよいこと、という意見を述べています。その他にも、召されたところに留まっていなさいという勧めも書いています。今の自分の置かれた状況が、望ましいと思われなくとも、その中で神の命令に従いなさいということをお勧めしています。

彼の意見の背後にある考えは、ここに書いてある通りです。この世の有様が過ぎ去るので、このような危機的な時は、この世のことに深く関わって思い煩うことのないようにしていなさいと勧めているのです。

1A 近づいている「時」 29

これまでも私たちは、世の終わりが近いことについて、主が来られることが間もなくであることについて、学んできました。ローマ13章には、こう書いてありました。「13:11 さらにあなたがたは、今がどのような時であるか知っています。あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。私たちが信じたときよりも、今は救いがかっと私たちに近づいているのですから。」

1B 時季としての時

その時にもお話をしましたが、今、キリスト教会の中には、主がいつ何時来られるか分からないこと、すぐにでも来られることについて否定的に語る人々が増えています。その人たちが言うには、「そのようなことを 20 年前、30 年前にも聞いた。それなのに、まだ来ていない。」ということです。確かに、イエス様が来られることを日時設定するような誤ったことをする人々が、時々、出てきます。周期的に出てくると言ってもいいでしょう。そのような行き過ぎた一部の熱狂のために、すぐにでもイエス様が来られるかもしれないという、使徒たち誰もが語っていた教えが、反動でないがしろにされています。

そういった疑問や批判をしている人が誤解しているのは、ここで言っている「時」の元々の意味を読み違えてしまっているからです。パウロが、「時は短くなっています。」と言っている時に、ギリシア語は、「カイロス」を使っています。これは、物理的な時間ではありません。物理的な時間は、「クロノス」というものがあります。けれども、クロノスが時間に対して、カイロスは時季と訳したらよいでしょうか。時と季節の季の時季です。何かをするのに、ちょうど良い時というような意味合いです。あるいは、時と機会の「時機」とも言えますね。何かをするちょうど良い機会という意味です。「収穫の時が近づきました。」「収穫の時は短くなっています。」と言い換えたら、良く分かると思います。もっと幅のある期間なのです。そして、客観的な時間よりも、その期間の中で何かをする機会が来ている。時が満ちた、というような目的に焦点を当てています。

イエス様が、サマリアを通られた時に、井戸のところで座っておられたら女がやってきました。この女はイエス様がメシアであると言われたので、そのことを信じて村にいて伝え始めました。その時に弟子たちが戻って来ました。そして弟子たちに言われました。「ヨハ 4:35 あなたがたは、『まだ四か月あって、それから刈り入れた』と言ってはいませんか。しかし、あなたがたに言います。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。」これは、サマリアの人たちがメシアを信じ受け入れて、救われるばかりになっているということです。この後で、サマリア人たちがイエス様から話を聞き、多くが信じます。けれども、それだけではありませんでした。イエス様は、天に昇られる前に、聖霊が弟子たちの上に臨み、力を受ける。「エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」と言われました(使徒 1:8)。事実、エルサレムから人々が散っていき、ピリポがサマリアでイエス様を宣べ伝えました。彼らは次々と信じて行ったのです。このように、サマリアの人々に、福音を語りさえすれば、彼らは受け入れていくという状態を、「色づいて、刈り入れるばかりになっています。」と言い表したのです。

ですから、時が近づいていると聞く時に、「イエス様が戻って来て、もう天国に行けるのだから、何もなくていいや」とは、ならないのです。その逆で、主が命じておられることを、ことごとく行っていこう!となるのです。イエス様はご自分が戻って来られることについて、商売の喩えを使われました。「ルカ 19:13 彼はしもべを十人呼んで、彼らに十ミナを与え、『私が帰って来るまで、これで商売をなさい』と言った。」「ご自身が戻って来られるまで、そのしもべたちは商売をするのです。

つまり、熱心に働くのです。

2B 最も大切なこと

主が戻って来られる日、終わりの日を思うと、私たちは、最も大切なことだけをするようになりま
す。他にもいろいろやっていることがあるけれども、終わりの日が近いことを知れば、そのようなこ
とをしている暇はない、自分にとって大切なことだけをするようになります。

人は自分にとっての終わりが近づいているのを知れば、やることを選択しますね。ちょうど去年、
みなさんをご存じのように、私の妻は、体中に癌が広がっているかもしれないと言われていました。
元々、夫婦で一泊二日の旅を予定していましたが、行くことに決めました。体が癌に襲われている
のなら、むしろ一緒にこのように時間を過ごすことはできなくなると思ったからです。(注:幸いにも、
癌ではないだろうという診断を数か月後に受けています。)しかしその他は、彼女は生活が大きく
変わりませんでした。なぜなら、今、自分のしていることが神のみこころであることを良く知ってい
たからです。まず、自分自身が、死から救ってくださるイエス様を信じています。死んでもよみがえ
らせてくださり、永遠のいのちを与えておられるイエス様を知っています。次に、イエス様を人々に
伝えています。だから、癌だと言われて慌てることはなかったのです。いつ死んでもおかしくないよ
うに、すべきことをしているからです。

次の話も聞いたことがあります。若い牧師さんでしたが、難病にかかり、徐々に体が動かなくな
ってしまいました。もう死ぬことは確実になっていました。そこで、彼のことを気遣っていた牧師が、彼
にすることを与えました。牧者チャック・スミスの黙示録の聖書メッセージを日本語に訳させるよ
うにした、と言っていました。そう、難病で説教壇に立つことができなくなっている彼は、それでも、タ
イプはすることができます。それで寝床の中で翻訳をして、それでみことばを人々に伝えることは
できるのです。テモテ第一には、「5:5 身寄りのない本当のやもめは、望みを神に置いて、夜昼、
絶えず神に願いと祈りをささげています」とあります。年老いていて、また貧しく、自分のできるこ
とはものすごく限られています。しかし、祈ることにおいては、だれよりも時間があります。しかし、教
会にとって、最も大切な働きを彼女は選んでいるのです。祈りなくして、教会は成り立ちません。祈
り無くして、福音宣教は成り立ちません。このように、自分が弱くなり、自分の終わりが近づいてい
ることを知っている人が、強い人、これから先が長い人以上に、大きな働きができるのです。それ
は、最も大切なことが何かを知っていて、それを選んでいるからです。

このように、私たちがいろいろなことをしていて、思い煩うほどになっているところに、主が戻って
来られる時が近づいているのを知ると、霊的な断捨離をするのです。主の前で意味がないだろう
と思われること、最低限、このことをしていることが大切だと思われることに狭めていきます。イエ
ス様が、マルタに対して言われました。「ルカ 10:41b-42 マルタ、マルタ、あなたはいろいろなこ
を思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選
びました。」この、一つだけの必要なことをするのです。

3B 主のみこころ

主が、ご自身が戻って来られることについてそれを信じて生きてほしいと願われている理由、目的があります。その大きな目的を三つ挙げますと、一つは、福音を世界に伝えることです。「マタ 24:14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」福音が世界に宣べ伝えられて、それから終わりが来るとイエス様が言われます。ですから、主が来られることを待ち望む人は、その前に福音が世界にくまなく広がっていることを願っているはずで、主のお働きに自分が関わっていくように導かれていきます。

パウロは、そこにおいて思い煩うような人ではありませんでした。彼はローマで皇帝ネロの裁判を受けるために囚人となっていました。彼は気落ちしませんでした。むしろ、自分に鎖をかけている親衛隊に福音を伝え、彼らの間に信仰が広がっていました。そして、この時とばかりに、パウロに反対していた者たちが、その妬みから宣教の働きを彼の居ない間に広げていったのです。パウロは、そこで何と思ったか？「ピリピ 1:18 しかし、それが何だというのでしょうか。見せかけであれ、真実であれ、あらゆる仕方でキリストが宣べ伝えられているのですから、私はそのことを喜んでいきます。」パウロが、ここまで福音が宣べ伝えられていることに集中できていました。下手な分派争いに巻き込まれることはなかったのです。主が間もなく来られることを信じていたからです。

次に、キリストが来られることを待ち望むと、この方が清いように自分を清めます。「Iヨハ 3:2-3 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。3 キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」キリストが清い方で、この方をありのままに見ることが、再臨の出来事です。ですから、自分が恥ずかしくないように、自分自身を清めることに気を付けるようになります。パウロや他の使徒たちが、いろいろな教会に手紙を書きましたが、主が来られる時に、傷のない者、責められることのない者であるようにという祈りを献げています。「あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びとともに栄光の御前に立たせることのできる方(ユダ 24)」そのようにして、主にお会いするという目標に向かって、私たちは歩んでいくのです。

そして三つ目ですが、それがここ、パウロが書いていることです。つまり、「世の有様は過ぎ去っていく」ということを理解して、世に深く関わりすぎないようにする、ということです。キリスト者は、世に生きていますが、世に属していません。世の中にいるのですが、世との交わりはないのです。主は、ご自身が戻って来られること、世の終わりについてお語りになった時にこう言われました。「マタイ 24:35 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。」消え去り、過ぎ去る事柄に関わりすぎないようにすることです。ヨハネは第一の手紙で言いました、「Iヨハ 2:17 世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」みこころを行うことに集中できるようになります。

4B 御子の到来から始まる終わり

ところで、パウロは、コリントの教会の人々にかなり具体的に、結婚について、世の有様が過ぎ去るということから、大胆な意見を言っています。独身者はそのままにいるほうがよい、今、結婚しようとするれば苦難を招いてしまうから、とまで言っています。そこまで差し迫った危機的な状況(7:26)として語っています。歴史的には、パウロがこの手紙を書いていた頃には、飢饉が何度となく起こっていたそうです。

何か危機的なことが起こる度に、これは終わりの時だと煽ったり、騒ぐのは得策ではありません。イエス様が、人々に惑わされたり、戦争やその噂を聞いてうろたえてはいけぬ、と言われました(マタイ 24:6)。しかし、主は私たちに注意喚起をされます。何かの出来事によって、世の終わりには、とてつもない災難が来ることを思い出すために、そのような予兆を与えられることがあります。イエス様のところに、ピラトがガリラヤ人の血をガリラヤ人のいけにえに混ぜたと言ってきた人がいて、イエス様は、「ルカ 13:5 シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも多く、罪の負債があったと思いますか。そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」シロアムの塔で倒れて死んだという事件を他人事のように見なしていた人々に対して、神のさばきの時はあなたがたも、悔い改めないなら滅びると、終わりの日について言及されたのです。

実に、キリストが来られてから終わりの時は始まりました。「ヘブル 1:1-2 神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られました。この終わりの時には、御子にあつて私たちに語られました。」主は、ご自身が来られてから、「神の国は近づいた。悔い改めなさい。」と言われて、終わりの日を語られたのです。そして、ご自身が十字架につけられ、三日目によみがえり、それから天に昇られる時、弟子たちがイエス様にこう言いました。「使徒 1:6 主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」イエス様は、「1:7 いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。」と言われました。これは、十字架に付けられる前、オリーブ山においても語られていたことです。

しかし、このことを持って、使徒たちは、「神の国の到来は、まだまだ後のことだ」などと思っていませんでした。聖霊が注がれて、それからユダヤ人の同胞たちに、世の終わりが来るヨエルの預言をペテロが引用して、そこから聖霊が注がれる約束があることを説いたのです。彼らが悔い改めて、主が来られてその裁き、滅びから免れることを願いました。「3:20 そうして、主の御前から回復の時に来て、あなたがたのためにあらかじめキリストとして定められていたイエスを、主は遣わしてくださいませ。」いつの日時だということは私たちに知られていませんが、しかし、自分たちが主の再臨を見ることになるとは信じていたのです。主は、どの世代にキリスト者も、自分たちの世代に主が戻って来られると信じるように願っているのだと見ることができます。

2A 世との軽快な関わり 29-31

1B ないような付き合い 29-30

そこでパウロが勧めているのが、「あたかもないようにしている」ことです。「**今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。³⁰ 泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように、買う人は所有していないかのようにしていなさい。**」

ここを正しく読むには、前後関係、文脈がとても大事になってきます。「**妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。**」というのは、今、結婚関係を持っているのに、同じ屋根の下で別居離婚しなさいと言っているのではありません。結婚のことで、主を喜ばすこと、主のみこころを行うことから注意が逸らされるな、ということなのです。そもそも、結婚というのは永遠ではありません。キリストと教会の関係という永遠の関係を地上で表すために、男と女が結ばれるのだということを、パウロはエペソ 5 章で話しています。イエス様は、人々が復活したら、御使いのようになり、結婚はしないのだということを話しておられます。ですから、キリストと教会という永遠の関係のために、自分たちが立てられているのだという見方をしていることが、妻のいない人のようにしているということです。この優先順位を間違えれば、主が来られるのが近づくにつれて、妻を喜ばせることと主を喜ばせることの間で葛藤が起こり、思い煩いが増えてきます。

同じように、泣くことも、正しい見方をしていないといけません。例えば人がなくなった時に、泣く時があります。けれども、死んだ後はすべて主の御手の中にあります。ですから、あたかも自分自身の手の中にその人がいるかのように、失ったことを泣いてはいけないということです。泣くのですが、主の前で泣くと言ったらよいでしょう。人の死を目の前にして、いのちを与え、いのちを取る神を知るのです。だから、悲しみの中に溺れることはないのです。そして喜びも、喜んでいないようにしなさいということではなく、喜ばしいことがあっても、それは一時的なことであり、取り去られることはあるということです。主の喜びのみが残ります。そして、買ってもしないように、ということも戒められていますね。これも、買ってはいけないということではなく、その買っているものは天の御国には持っていくことはできないということで買うのだということです。

しかし、どうでしょうか？キリスト教の世界で、最も多く語られているのは、この三つなのです。幸せな結婚生活の話題についての本が店頭で積み上げられます。そして、喜んだり、泣いたり、感情の起伏や安定についての本が売れます。そして、いかにお金を管理するかについての本も売れますね。世の中ではそうしたハウツーは売れて当たり前ですが、キリスト教会も同じというのは悲しい性です。それよりも、主にまみえる日、天における祝福、主の再臨と神の国、主ご自身についてのすばらしさの本が売れていないといけません。主の希望があってこそ、結婚、感情、財産ですから。

神の裁きがある時に、結婚が取り去られることが聖書には、多く語られています。エレミヤは、エルサレムの住民がバビロンによって全て捕え移されることを預言するために、彼自身が「妻をめと

るな。息子も娘も持つな。」と戒められました(16:2)。イエス様は弟子たちに、ご自分が戻られる日はノアの日のようであり、「マタ 24:38 洪水前の日々にはノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。」とされています。そして黙示録で、大きな都である大バビロンが崩壊する時も、「黙 18:23a ともしびの光も、おまえのうちで、もはや決して輝くことはない。花婿と花嫁の声も、おまえのうちで、もはや決して聞かれることはない。」と宣言されています。

当時は、婚姻は私たちよりもはるかに長い期間に渡って用意します。村ごぞって一つの結婚に関わります。ですから、今の私たち以上に、キリストに従うことにおいて、「結婚しなければいけない」ということが、従わないことの弁解として使われるのです。裁きというのは、主ご自身に従う、主を喜ばせるということに、これらの日常のことが妨げりなり、思い煩いになるようなことについて、すべて取り去られるということです。

2B 過ぎ去る世の有様 31

そして 31 節で、「世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。」と言っています。パウロが私たちに勧めていること、意見していることは、結婚や仕事などを控えるべきだということではありません。すべて一つ一つは、祝福されることです。むしろ、結婚しているものは必ず結婚したままでいなさいと言いますし、これから結婚の人たちも止めていません。しかし、これらが、主イエスへの信仰、キリストとの歩み、礼拝、心の中の平安や良心に悪い影響を与えるようになったら、「世と関わりすぎている」ということになるのです。

世と関わるなということではなく、関わりすぎるのが問題です。世のことは、軽い付き合いにしておきなさい、ということです。すべて主が何とかしてくださいます。危急の時、世の終わりが近い時は、その思い煩いが非常に強くなる時でもあります。軽くしていないと、どんどんひっぱられるのです。主から注意を逸らす力が強く働くのです。自分のしていることをして、いつの間にかそれだけになっている、主を覚えなくなっていることはとても容易にできてしまいます。最後に、主が戻られるにおいて、警告しているみことばで終わりにしたいと思います。「ルカ 21:34 あなたがたの心が、放蕩や深酒や生活の思い煩いで押しつぶされていて、その日が罨のように、突然あなたがたに臨むことにならないように、よく気をつけなさい。」